主　論　文　要　約

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	安達　香織

主 論 文 題 名：

東北地方北部における縄紋時代中期後半の土器型式編年研究

（内容の要旨）

編年体系の確立は、先史時代研究の基盤となる重要な課題である。日本先史土器型式編年研究は、1920 年代後半から 1960 年代にかけて活躍した、山内清男（やまのうちすがお）により基礎が築かれた。山内は、1937 年に、縄紋時代早期から晩期にかけての、全国九つの地域のそれぞれ約 20 の型式からなる編年を統合した「型式網」を公表した。山内は方法論を具体的に述べることはなかったものの、研究成果や人類学専攻者であったという学問的出自からみて、生物分類の方法を応用していることは明らかである。

後続の研究者たちは、この「年代的組織」を補充するあるいは細分するといったかたちで、地域ごとに研究に取り組んだ。その結果、現在までに全国的な縄紋土器型式による編年体系は大部分できあがり、世界のあらゆる地域・時期の相対編年のなかで最も緻

縄紋土器型式の大別

	渡島	陸奥	陸前	關東	信濃	東海	畿内	吉備	九州
早期	住吉	(+)	槻木 1 〃 2	三戸・田戸下 子母口・田戸上 茅山	曾根？× (+)	ひじ山 粕畑		黒島×	戦場ケ谷×
前期	石川野× (+)	圓筒土器下層式（4型式以上）	室濱 大木 1 〃 2 a,b 〃 3—5 〃 6	選田式 花積下 選田式 關山 選田式 黒濱 諸磯 a,b 十三坊臺	(+) (+) (+) 踊場	鉾ノ木×	國府北白川 1 大歳山	濃ノ森 里木 1	轟？
中期	(+) (+)	圓筒上 a 〃 b (+) (+)	大木 7a 〃 7b 〃 8 a,b 〃 9, 10	御領臺 阿玉臺・勝坂 加曾利 E 〃（新）	(+) (+) (+) (+)			里木 2	曾畑 阿高 出水 ？
後期	青柳町× (+) (+)	(+) (+) (+) (+)	(+) (+) (+) (+)	堀之内 加曾利 B 〃 安行 1, 2	(+) (+) (+) (+)	西尾×	北白川 2 ×	津雲上層	御手洗 西平
晩期	(+)	龜ヶ岡式 (+) (+) (+) (+)	大洞 B 〃 B-C 〃 C1,2 〃 A,A'	安行 2-3 〃 3	(+) (+) (+) 佐野×	吉胡× 〃 × 保美×	宮瀧× 日下×竹ノ内× 宮瀧×	津雲下層	御領

註記 1. この表は假製のものであつて，後日訂正增補する筈です。
2. (+)印は相當する式があるが型式の名が付いて居ないもの。
3. (×)印は型式名でなく，他地方の特定の型式と關聯する土器を出した遺跡名。

図　縄紋土器の型式網（山内 1937 より一部変更）

密で精度の高いものとなっている。縄紋土器型式編年研究は、その方法論と成果とが積極的に国外に発信されるべき日本考古学における最も重要な研究のひとつとなっている。

しかし、いまだに編年研究に遅れがみられる地域・時期もある。その原因として、資料上の問題と方法上の問題とがあげられる。例えば、基準となる既発掘標本が未報告であることや、全体との関連性を問うことなしに細部の研究のみに没入したことなどである。だからこそ現在、編年未整備部分の研究を重点的におこなうことが喫緊の課題となっている。

そうした未整備の地域・時期のひとつである東北地方中期後半の編年の基準標本となりうる資料は、慶應義塾大学に長年、未整備のまま保管されていた。本研究は、東北地方北部における中期後半の土器型式編年の整備を進めることを目的とし、型式研究の方法論の検討及び当該資料の整理・分析に取り組んだものである。

【第１章　土器型式編年研究に関する方法論的考察】では、系統分類学（systematics）の観点から、山内の研究方法の検討をおこなった。生物学の一分科である系統分類学は、生物が形態と作用と歴史をもつことに着目し、生物の系統発生に基づいて分類体系の構築をめざす学問分野である。そこでは種が基本単位となる。縄紋土器型式研究も、型式を年代的かつ地域的分類の単位として土器を体系化する（systematize）ことをめざすものである。ただし人工物には、生物「進化」のような一方向の時間的な変化のみならず、常に同時期の地域的な変化がある。土器型式の形成（土器変化）は、時間の経過（在地の伝統・変遷）と地域間交渉（他地方からの影響）との結果なのであり、そこには、時間的な系統（lineage、line）のみならず地域的な‘系統’があるといえる。系統は、生物においては、上がひとつで下へと枝分かれするいわゆる系統樹として、可視化されるのに対して、縄紋土器においては、各地域における前代との対応関係の垂直方向の連続と各時期における他地域との対応関係の水平方向の連続とが絡み合う、縦横連鎖構造で表わされる。これが「型式網」としての編年表なのである。

生物系統分類の方法は、通常、個体の形質（character）の比較による「相同性」の決定、形質状態（character state）の比較による「変化の方向性」の決定、それに基づく「類縁関係」（relationship）の合理的決定という手順をふむ。類縁関係とは、系統上の近接性の程度のことであり、それを明らかにすることは系統を解明することに他ならない。また、生物の形態について、細胞、組織、器官の各レベルで相同は観察されるが、生物の基本的な構造は、マクロな形態レベルである諸器官の分化や配置の状態から捉えられる。したがって器官の形態や位置関係の比較による比較解剖学的知見が、生物系統分類を秩序づけてきた。

同様に、型式編年研究も、土器個体の諸‘形質’つまり諸特徴を比較分析し、それに基づいて土器の‘類縁関係’を明らかにするものということができる。多くの形質のうち、土器型式編年研究で主に分析対象とされてきた文様にも階層性があると捉えられる。

山内が提唱した、縄紋土器の外面に帯状に認められる「文様帯」は単位文様の集まりであり、また単位文様は文様要素の集まったものであり、各レベルで相同の関係を設定できる。縄紋土器個体の文様は上位の形態レベルである文様帯の状態から捉えられるのである。

文様帯は、時と場によって内容に変化をともないながらも概ねすべての縄紋土器型式において系統的に間断なく保持され続けている。文様帯は、器形や縄紋の範囲といった他の多くの‘形質’と様々な相関関係をもっていることが重要であり、そこに他の形質の特徴が種々の程度に反映されているということもできる。最も基本的なレベルを文様帯におく文様の構造的・系統的分析は、縄紋土器全体の系統関係の論理的決定を可能にする。

ただし、完成後の表面的なかたちの類似性に準拠するのみでは、系統の判断がつきかねる場合がある。この問題を解決するために、筆者は人工物である土器からは、綿密な観察により各形態・装飾の重複関係（切り合い関係）を把握し、成形・加飾の先後関係を復元することができることに着目している。製作工程（process）を含めた技法の分析により、次元を増やして文様を立体的に捉えることで、より着実な相同の識別が可能になるであろう。もちろんこれまでにも土器の各製作段階の様々な技法について、多くの観察、分析結果が蓄積されてきた。しかし、型式編年研究のための技法の体系的な分析は十分ではない。

型式編年研究の方法は、文様帯を基盤とする諸‘形質’の独自の‘系統分類’といえるのである。土器の体系は、動的な構造的関連のもとにあるひとつの弁証法的な統合体として捉えられる。それを様々なレベルから操作的・認識論的に切断してみることによって、諸型式がどのように関連しあっているかを確認することができる。形質’に人工物独自の製作工程を含めた技法を組み込むことで、型式学的研究の方法をより鍛え上げることが可能であるか検証したい。

【第２章　東北地方北部縄紋時代中期後半の土器型式編年研究史】では、「最花式」設定の経緯を含め当該地域時期の土器型式に関するこれまでの研究をふりかえった。1937 年の山内による「型式網」において、該当する地域時期の型式は設立されていない。しかし、前の時期の型式や他地域の型式との関係から、相当する型式の存在が確実視される「未命名型式」を示す記号がふされていた。その後、1960 年の慶應義塾大学の江坂輝弥作成の全国編年表において、「最花式」の名称が初めて使用された。これは、青森県むつ市最花貝塚遺跡Ａ地点の 1948 年の発掘調査出土土器に基づいたものと考えられるが、その内容に関して具体的な解説がされないまま、現在その資料自体が所在不明となっている。その後Ａ地点は 1964 年にも調査されており、この資料は慶應義塾大学に保管されていたが、その内容に関しても具体的な解説はなされないままであった。

その間、江坂自身による「最花式」の位置づけは一定せず、1970 年に他遺跡出土土器によって示された「最花式」の内容は当時としても明らかに数型式を跨ぐものであった。

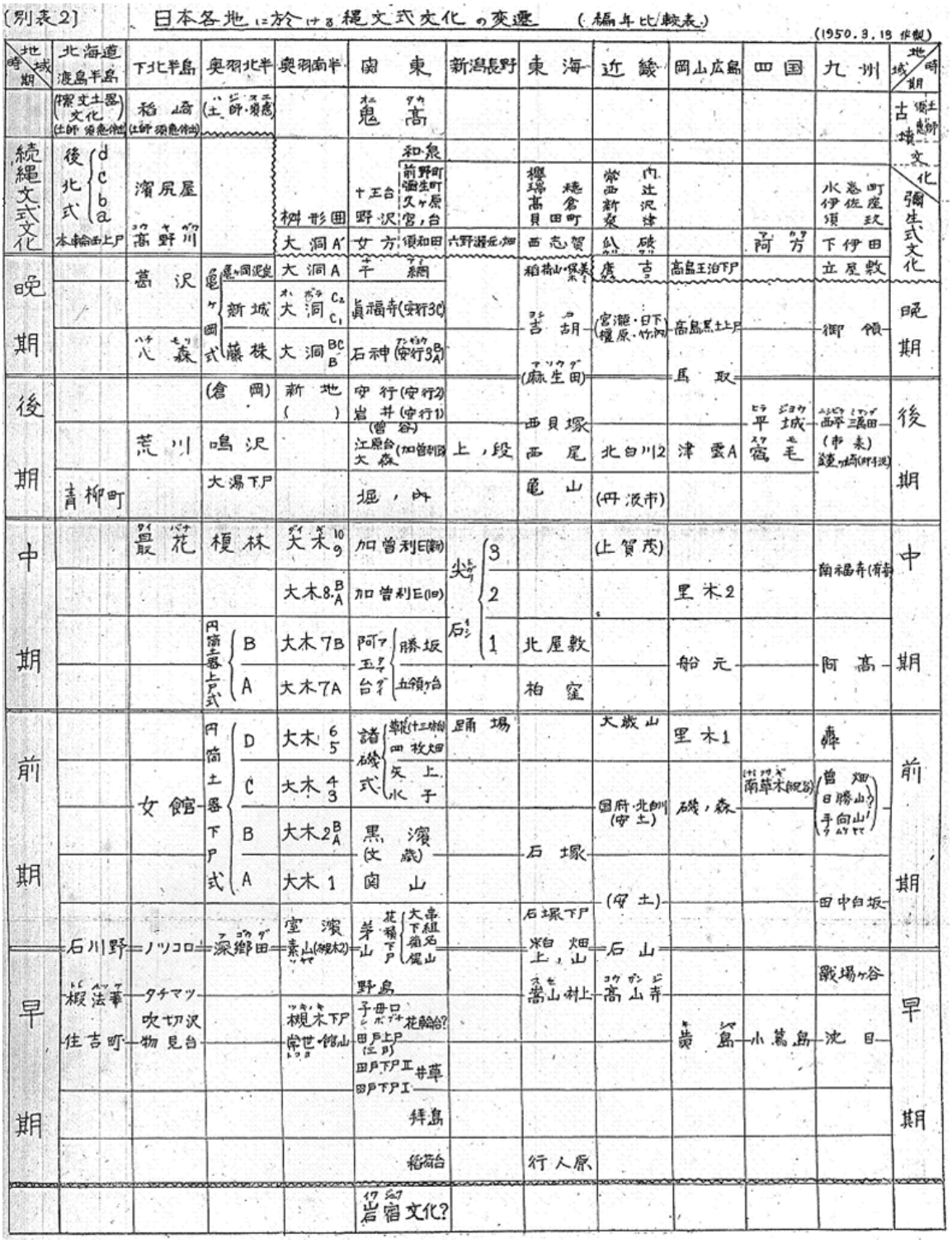

図　「最花」式の初出編年表（江坂 1950 より一部変更）

主　論　文　要　約

「最花式」は、江坂による設定当初から十分な型式学的分析を経たとは言い難い。さらに、後続研究者によっても、他遺跡出土土器によって研究が進められ、含められた土器の型式学的同一性、周囲の他型式との異同の確認がなされないまま、東北地方北部一帯から出土した雑多な土器が「最花式」に一括されてきた。この結果、現状の「最花式」は、いくつか系統に区分可能な土器からなっているのであり、そこに、年代的・地域的分類の単位を設定するためには、その系統的な整理を進めることが不可欠になる。個々の資料に地域的時間的位置を与えていくためには、分類の標準としての型式の縦横連鎖の構造を確立していかなければならない。

当該地域・時期の編年の構築のために、まずは、標式となり得る資料の整備と、その‘形質’の系統的な分析・検討をとおした「最花式」の再設定が必要である。このため、筆者は、慶應義塾大学に所蔵されていた最花貝塚遺跡 A 地点の 1964 年調査出土土器標本の整備と型式学的諸分析とをおこなうことにした。

第３章から第５章では、第１章で述べた方法論の有効性を検証する。具体的には、最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器標本の報告（第３章）と分析（第４・５章）をおこなった。

【第３章　青森県最花貝塚遺跡出土土器標本の整備と報告】では、慶應義塾大学所蔵の最花貝塚遺跡Ａ地点 1964 年調査出土土器標本の整備と報告に取り組んだ。まず木箱 61 箱分の全資料の洗浄・分類・注記・接合・リスト作成などを実施した。そのうち「最花式」の基準資料が出土したとされるＡ地点から出土した木箱約 25 個分の資料から、時期の明確に異なる土器を除いた、口縁部・底部を含むすべての個体と文様をもつ胴部破片個体とをあわせた計 177 個体の土器標本を対象とした。図版作成（拓本・実測・トレース）、個体ごとの観察表作成などの作業を実施し、実測・拓本図版及び観察表を報告した。粘土紐の接合方法や粘土紐の輪積み、文様、縄紋の先後関係など、これまであまり注目されてこなかった細かな技法の痕跡も観察し、記載・図化した。

Ａ地点出土土器は、２つの器形で構成されており、とくに総量の多い器形の土器は、装飾で３類にまとめられることが判明した。一方で、全体は平縁、胴部全面縄紋などの一致する特徴をもつことが確認できた。Ａ地点出土土器は、分類の標準として適したまとまりのある資料といえることを明らかにした。本報告は、Ａ地点出土土器として実測・拓本図版及び観察表を報告した現在のところ唯一のものである。

【第４章　縄紋土器の技法と型式―分類指標としての製作工程―】では、東北地方北部中期後半の編年の再構築を目的に、最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器の技法に着目した分析をおこなった。最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器は、形態・装飾、技法に明確な特徴がある。主体となる胴部に屈曲のない平縁深鉢形土器（Ｉ類土器）には、器体を成形後、「胴部（器面）縄紋」、「口縁部段」、「胴部沈線文」のすべてあるいは一部が加えられている。各装飾の組み合わせ及び加飾の順序により、１「胴部縄紋」、２「口縁部段」、３「胴部沈線文」の工程となるＩＡ類、１「胴部縄紋」、２「口縁部段」の工程となるＩＢ類、１「器面縄紋」の工程となるＩＣ類に分けられる。器体のサイズや縄紋原体の

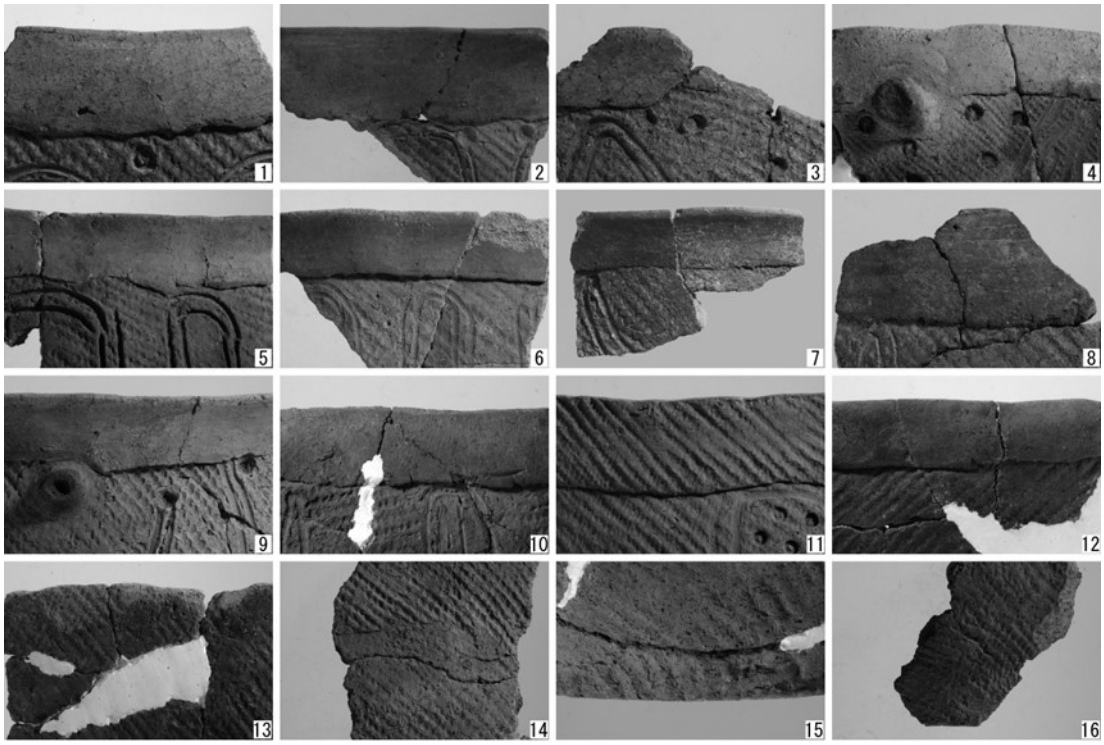

図　最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器の技法を示す部分写真（慶應義塾大学民族学考古学研究室蔵）

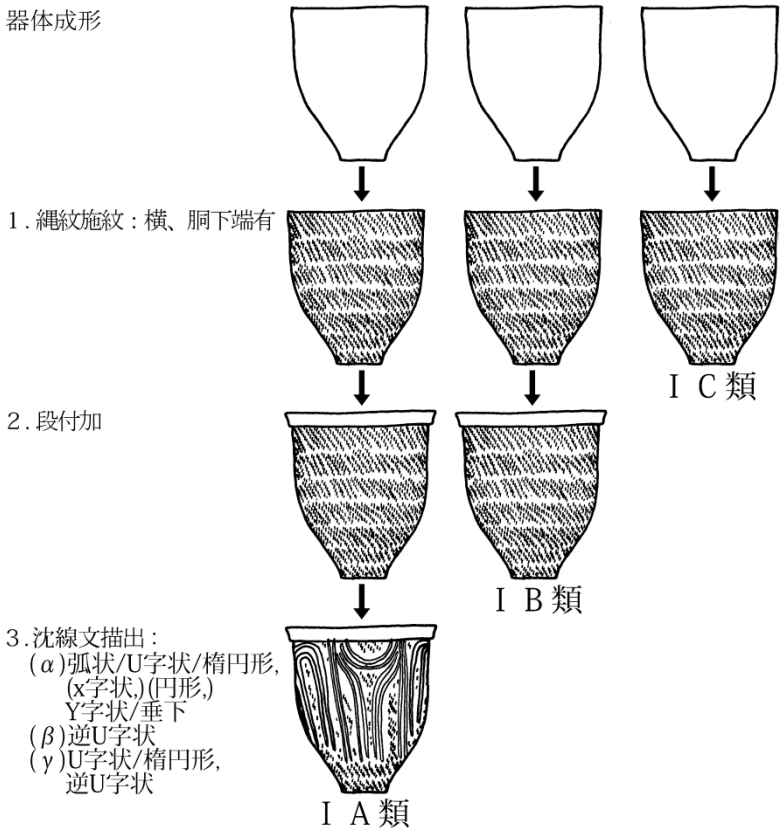

図　最花貝塚遺跡Ａ地点出土Ｉ類土器の製作工程模式図

種類は、ＩＡ、ＩＢ、ＩＣ類の順でまとまりがある。つまり、最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器は、屈曲のある平縁深鉢形土器（Ⅱ類土器）もあわせて四とおりの土器をつくり分ける特徴的な製作システムでつくられたと考えられる。

一方従来「最花式」と同一の型式とされることの多かった、青森県外ヶ浜町中の平遺跡出土第Ⅲ群土器（青森県埋蔵文化財センター所蔵）についても同様の分析をおこなった。この一群は、最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器とは区別できる特徴をもっている。1「口縁部の弱い段」まで器体を成形後、２「胴部縄紋」、３「胴部沈線文」の工程となるＡ類と１「口縁部の弱い段」まで器体を成形後、２「胴部縄紋」の工程となるＢ類とに分けられる。最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器とは異なる特徴的な製作システムでつくられたと考えられる。

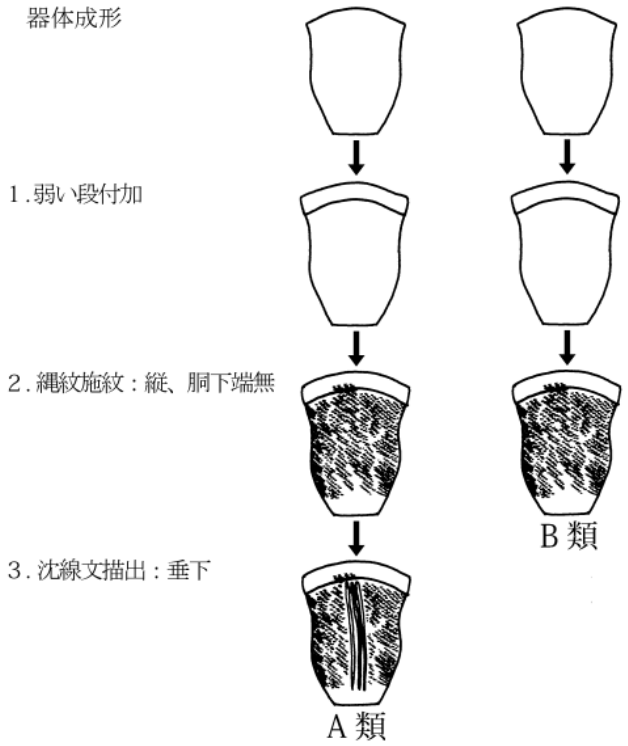

図　中の平遺跡出土第Ⅲ群土器の製作工程模式図

前者、後者はそれぞれ形態・装飾のみならず技法に明確な特徴があり、地域の異なる二つの遺跡からそれぞれまとまって出土したことから、前者、後者を基準とする型式を順に最花Ａ式、中の平Ⅲ式と仮に呼ぶことにした。製作工程を含めた技法、形態・装飾の特徴の他に、文様変遷過程も異なるようであり、二者は、従来のように同一系統で時期的に連続するものとしてではなく、概ね並行期の、系統を異にする二つの型式として理解できる。製作工程は、型式の重要な分類指標となりうるのであり、型式学的研究には、工程という観点を含めた技法の分析を組み込むことが有効である。

【第５章　縄紋土器の文様の構造と系統】では、最花貝塚遺跡Ａ地点出土土器の文様の構造及び系統に着目した詳細な分析をおこなった。文様帯、単位文様、文様要素のレベルに分けて構造的に把握した。文様は口縁部の段をもつ痕跡的なⅠ文様帯と胴部の沈線文様をもつⅡ文様帯とに分かれている。沈線文様は 13 種の縦位の単位文様を組み合わせて横位に並列させたものである。

東北地方北部における時期的に遡る型式や、東北地方中南部における諸型式の文様の構造及び系統を把握した上で、当資料を基準とする仮称最花Ａ式との関係を分析した。その結果最花Ａ式の文様帯の配置は、在地の榎林式(新)から続いたもの、胴部沈線文様

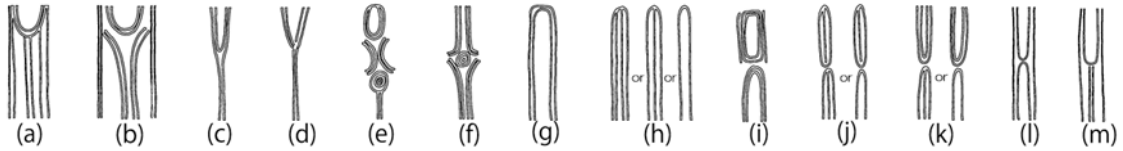

図　最花貝塚遺跡Ａ地点出土ＩＡ類土器の単位文様

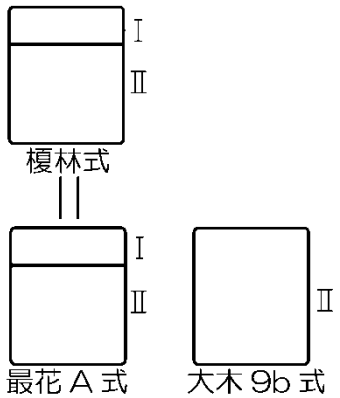

図　最花Ａ式と関係諸型式との文様帯の配置の比較

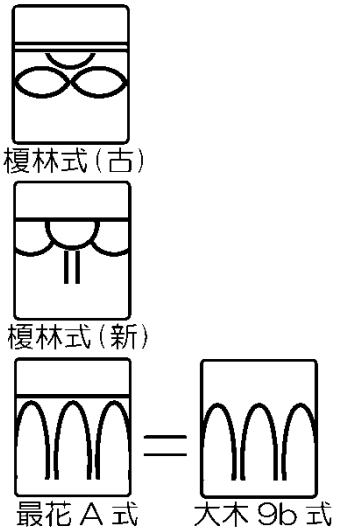

図　最花Ａ式と関係諸型式とのⅡ文様帯の構造の比較

全体の構造は東北地方中南部の大木 9b 式から入り込んだもの、単位文様は榎林式(新)・大木 9b 式二つの系統の交錯したものといえることを示した。なお、榎林式(新)から最花A式への変遷を取り次ぐ未命名型式が、大木 9a 式並行に存在すると考えられる。最花A式は、榎林式(新)に続く型式の後、大木 9b 式と並行するとみてよい。

同様の分析を、中の平遺跡出土第Ⅲ群土器を対象におこなった。仮称中の平Ⅲ式の製作工程は、口縁部に明確な段による装飾の作出を意図したものとはいい難く、胴部沈線文様をもつⅡ文様帯のみの構造といえる。沈線文様は一種の文様単位を横位に連続させた単純なものである。文様様帯、単位文様の配置、単位文様さらには技法に、東北地方中南部の影響がつよくうかがわれ、最花A式とは系統を異にするものと考えられた。

したがって、最花A式と中の平Ⅲ式とは、系統的基盤が異なり、榎林式から分かれた二つの型式として捉える必要があることが確認された。このように、文様帯、単位文様、文様要素といった各レベルでの文様構造及び系統に着目した比較研究で、型式間の関係の解明は進むのである。

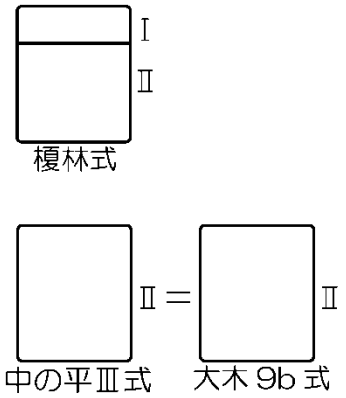

図　中の平Ⅲ式と関係諸型式との文様帯の配置の比較

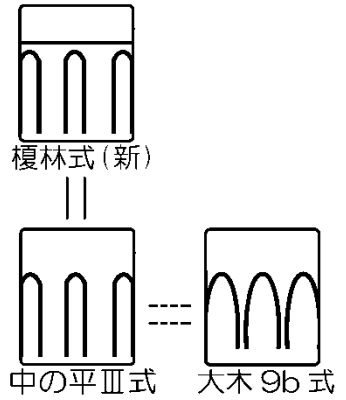

図　中の平Ⅲ式と関係諸型式とのⅡ文様帯の構造の比較

主　論　文　要　約

【第６章　東北地方北部中期後半の土器型式編年とその広範な比較・総合への見通し】では、まず当該地域時期の編年を整備し、東北地方中南部、関東地方との中期中葉から後葉の型式間の関係を考察した。

最花Ａ式と中の平Ⅲ式との口縁部は、一見すると「無文」であることが類似しているが、製作工程からみれば、質の異なるものであり、‘相似’のものといえる。最花Ａ式の、運動的情報としての‘形質’（例えば縄紋原体の横位回転や、胴部に縄紋原体回転押捺後の粘土紐付加）は前代の榎林式（新）に続く型式にも、東北地方中南部の大木 9b 式にも認められないことから、北海道型式の系統のものと想定されるが、外見的・視覚的 ‘形質’は前代型式の系統と南方型式の系統の組み合わさったものと考えられる。広域にみると、最花Ａ式の製作工程は、いく型式か遡った東北地方北部の型式の特徴が、北海道型式に入り込み続き、それが逆輸入されて成立した可能性があるが、いずれにせよ最花Ａ式は複数系統の‘形質’が入り込んで成立した型式といえる。その分布は、下北半島を中心として秋田県北部まで分布が認められた。

一方で、中の平Ⅲ式は、南方とのかかわりの強い、榎林式（新）に続く前代の型式の‘形質’が継続し、南方型式の系統の主に視覚的‘形質’が若干入り込み成立した型式といえる。中の平Ⅲ式は、比較的単純な前代型式の技法や文様から、あまり変化の認められない型式である。その分布は、むしろ津軽地域とその周辺の狭い範囲に限定されていた。

さらに、中期中葉から後葉の東北地方北部、東北地方中南部、関東地方の諸型式の製作工程を含めた技法、形態、装飾の特徴を概観し、型式間の関係を考察した。広域からみても、本研究で整備した東北地方北部中期後半の型式編年は、分類の標準の縦横連鎖構造のなかで、論理的に説明がつく。

以上、本研究では、未報告であった基準資料を分析し、未整備の地域・時期の編年を明確にした。さらに人工物の系統分類としての型式編年研究に、人工物独自の製作工程を加味した技法の分析を組み込むことで、より蓋然性の高い「相同性」及び系統関係の決定がおこなえることも示した。製作工程を含めた技法の分析は、文様帯に基づく系統的な型式編年研究の方法を確実に鍛え上げることができるのであり、今後もそうした観点から、本研究成果をひとつの基軸として、地域的・時期的に広範な型式の体系を確立していくことが肝要である。

【引用文献】
江坂輝彌 1950「縄文式文化について（その一）日本各地に於ける縄文式文化の変遷（編年比較表）」『歴史評論』第 4 巻第 5 号　民主主義科学者協会　別表 2
山内清男 1937「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古學』第 1 巻第 1 号　先史考古學會　29-32 頁